

母性看護技術演習における学生による評価と今後の課題

阿部 範子¹⁾ 志賀くに子²⁾ 伊藤 榮子³⁾

Students' evaluation of the exercise session on maternal nursing technology and future issues

Noriko ABE Kuniko SIGA Eiko ITOU

要旨

本研究は現在実施している演習方法を学生が評価することで、学生から見た授業過程の質を把握し、効果的な演習を行うための示唆を得ることを目的として実施した。

調査はA短期大学2年次学生85名を対象とし、独自の調査用紙と「授業過程評価スケール—看護技術演習用—」を使用して演習終了後、学生による評価を実施した。

結果、総得点の平均、各下位尺度の平均ともに全て中得点領域に位置していたが、演習過程の質の向上のために、学生が演習をその場で振り返ることができる時間の確保、演習前に学習した教材との関連づけを行うことの必要性が明らかになった。

キーワード：母性看護技術・演習過程評価・学生による評価

Summary : The present study was conducted to assess the quality of the teaching process from the student's viewpoint by letting her rate the method of exercise which is in current practice so that a more effective exercise method may be conducted.

The survey was conducted with 85 second-year students at Junior College A. Immediately after an exercise session, they were asked to evaluate the course by using a specific questionnaire and a "scale for the evaluation of an educational course-for the exercise of nursing technology".

The means for both total and sub scores were close to the median scores; but the results indicated that to improve the quality of the exercise process, it will be necessary to allow sufficient time for students to digest what they have practiced so they can relate the learning from the session to the teaching materials that they have studied.

Key words : Technology in maternal nursing, evaluation of the exercise process, evaluation by students

I. はじめに

家族構成の多様化や、地域住民同士の関わりの減少等により、看護学生は出産を中心とした産婦・褥婦・新生児のイメージ化が困難な状況にあると考えられる。さらに母性看護学実習中は実践困難な看護技術が多く、技術を通じた観察や対象理解、看護のあり方の学習ができにくい状況にあ

る。そのため学内学習で効果をあげる必要があると考え母性看護技術演習を実施している。

演習過程の評価は個々の大学で行われ、学生にとって学習効果のある演習の実現に向けて検討されているものと思われる。また報告も見られ、学生の自己評価をもとに母性看護学の学内演習効果を考察したり、独自の調査用紙を作成し、演習内

看護学科 1) 講師 2) 准教授 3) 教授

本研究は第38回日本看護学会：看護教育で発表したものを発展させたものである。

本研究は平成18年度日本赤十字秋田短期大学の共同研究費助成を受けている。

容の検討を行うなど、さらなる効果的な演習に向けた改善策が見いだされている。本学母性看護学の学内演習は開学以来継続して行われ、年度ごとの評価を実施している。本研究ではさらに客観的な評価が行われるように「授業過程評価スケール—看護技術演習用—」¹⁾を用いた。スケールを使用し学生が評価することで、学生から見た授業過程の質を客観的に把握し、効果的な演習を行うための示唆を得ることを目的とする。

II. 本学における母性看護学の概要・演習の展開

母性看護学領域として、2年次前期に母性看護学概論1単位(30時間)、母性看護援助論Ⅰ・1単位(20時間)、2年次通年で母性看護援助論Ⅱ・2単位(40時間)を実施している。母性看護援助論Ⅱは主に新生児の看護、褥婦の看護を学習しており、単元「新生児の看護」終了後、母性看護技術演習(以下、「演習」とする)を実施している。

1. 事前課題：演習の約1ヶ月前に事前課題を提示した。事前課題は、演習内容の理解が容易であるように、技術の目的や方法を学習する内容とした(表-1)。課題は提出してもらい、内容が不足な学生には学習内容の追加等を指導し、全員に返却した。

表1 演習事前課題の内容

レオポルド触診法	子宮底長・腹囲測定	新生児の身体計測	沐浴
目的・方法・ 触診方法と観察事項・ 触診による胎児部分の 特徴	目的・方法・正常値	目的・必要物品・ 測定方法・ 測定部位と標準値	目的・禁忌・ 必要物品・ おむつ交換の要点・ 衣服の着脱の要点・ 沐浴の手順と要点・ 臍処置の方法と要点

2. 演習オリエンテーション：演習の約1週間前に実施した。演習の方法、演習終了後に記載する「技術演習振り返り用紙」の説明をし、沐浴のデモンストレーションを実施した。
3. 演習：学生を20名前後の4グループに分け1グループずつ演習日を設定した。1グループをさらにA~Cの小グループに編成し、教員1人が6~7人ずつ担当した。教員は担当す

る演習を学生に対しデモンストレーションを行い、その後学生が実施・指導を行った。演習は135分行い、間に10分間の休憩時間をとった。

演習にはコーケンベビー・妊婦腹部触診モデルⅠを使用した。

演習内容：妊婦—レオポルド触診法、児心音聴取、腹囲・子宮底測定
新生児—抱き方・寝かせ方、オムツ交換、ビン哺乳法、児頭計測、沐浴(表-2)

表2 演習内容と進行

	教員A	教員B	教員C
45分	〔沐浴〕教員のデモンストレーションを見学後、演習実施		
30分	〔新生児：抱き方・寝かせ方、オムツ交換、ビン哺乳〕 Aグループ	〔新生児：児頭計測〕 Bグループ	〔レオポルド触診法・児心音聴取・腹囲・子宮底測定〕 Cグループ
30分	Cグループ	Aグループ	Bグループ
30分	Bグループ	Cグループ	Aグループ

III. 調査の方法

1. 調査時期・対象

- 1) 時期：平成18年10月6日~10月27日
学生は2グループに分かれ、交互に2週間の基礎看護学実習Ⅱを実施している。実習クールではない2週間の間の1日が演習日となるように調整した。
- 2) 対象：演習を実施したA短期大学2年次学生85名。

2. 調査内容

1) 授業過程評価

「授業過程評価スケール—看護技術演習用—」¹⁾を使用した。このスケールは、尺度全体に関する α 係数は0.96、各下位尺度の α 係数は0.80から0.94の範囲にありこのスケールは全体としての内的整合性による信頼性を確保しており各下位尺度もおおむね確保されている。測定結果は、演習の成果がどうであったかを評価するものではなく、あくまでも学生による演習過程の評価である。スケールは6下位尺度39項目あり、各下位尺度は以下の内容を示している。

下位尺度Ⅰ「時間配分と内容の難易度」13項目

学生にとっての授業時間、練習・ノート記載時間、演習継続時間、進行速度の適切性と看護場面想起の容易さ、既習の知識との関連の明確さ、内容の整然さやわかりやすさ、といった内容の難易度を測定している。

下位尺度Ⅱ「意義・目的の伝達と指導・アドバイス」7項目

演習の目的・意義・要点の明確さと、学生にとっての指導・アドバイスのタイミングや説明速度・方法の適切性を測定している。

下位尺度Ⅲ「教材の活用・工夫」2項目

プリントやビデオなど、学生の演習内容の理解を促進する教材の使用程度と工夫の適切性を測定している。

下位尺度Ⅳ「デモンストレーション」6項目

デモンストレーションのタイミング、見やすさ、声、速さ、時間、手際の適切性を測定している。

下位尺度Ⅴ「学生間交流」2項目

学生同士の話し合い、協力の程度を測定している。

下位尺度Ⅵ「学生・演習への態度・対応」9項目

学生からの質問に対する対応の適切性や、学生の人間性・プライバシー・主体的学習の尊重および演習に対する教員の態度を測定している。

選択肢は「非常に当てはまる：5」「かなり当てはまる：4」「大体当てはまる：3」「あまり当てはまらない：2」「全く当てはまらない：1」の5段階リッカート尺度である。

2) 演習体制評価・事前学習自己評価

演習の実施時期・学生の人数等、演習体制に関する事、学生個々の事前学習への取り組みに関する事について「良い」「悪い」「どちらともいえない」の3段階の質問形式で質問紙を作成し実施した。

3. 分析方法・結果の解釈

授業過程評価は5段階評価を点数化し合計得点、下位尺度・項目ごとに平均得点を算出し比較した。高得点領域に位置する演習：学生が良いと思う演習の基準に適合しており、学生はこの演習の質を高いと評価している。中得点領域に位置する演習：学生の評価が中程度の平均的な演習である。低得点領域に位置する演習：演習過程に対する学生の評価は低い。¹⁾

演習体制評価・事前学習自己評価はアンケート結果を割合で比較した。

4. 倫理的配慮

演習終了後に調査用紙を配布し、評価結果を今後の演習過程の改善に用いること、無記名で行い成績には影響を与えないこと、調査用紙への回答は自由意志であることを口頭で説明し、同意が得られる学生のみ翌日提出を求めた。

IV. 結果

調査対象は85名であり74人の回答が得られた。全ての質問項目に回答があったものを有効回答とし、有効回答は60人、有効回答率81%であった。

1. 授業過程評価

尺度全体に関する α 係数は0.97、各下位尺度の α 係数は0.83~0.94の範囲であり、全体として内的整合性による信頼性を確保しており各下位尺度もおおむね確保されている。

総得点の平均は150.0点であり、中得点領域に位置していた。各下位尺度の平均得点は下位尺度Ⅰ「時間配分と内容の難易度」3.7点、下位尺度Ⅱ「意義・目的の伝達と指導・アドバイス」3.8点、下位尺度Ⅲ「教材の活用・工夫」3.5点、下位尺度Ⅳ「デモンストレーション」4.2点、下位尺度Ⅴ「学生間交流」3.8点、下位尺度Ⅵ「学生・演習への態度・対応」4.0点であり、全て中得点領域に位置していた(表-3)(図-1)。

さらに39項目それぞれの平均得点を見てみると(表-4)、平均得点が低めであるのは、以下の通りであった。

表3 授業過程評価：総得点・下位尺度特典

授業過程評価	平均得点	低得点領域	中得点領域	高得点領域
総得点	150.0	39.0~124.1	124.2~176.0	176.1~195.0
下位尺度Ⅰ【時間配分と内容の難易度】	3.7	1.0~2.7	2.8~4.3	4.4~5.0
下位尺度Ⅱ【意義・目的の伝達と指導・アドバイス】	3.8	1.0~3.1	3.2~4.7	4.8~5.0
下位尺度Ⅲ【教材の活用・工夫】	3.5	1.0~2.6	2.7~4.6	4.7~5.0
下位尺度Ⅳ【デモンストレーション】	4.2	1.0~2.9	3.0~4.6	4.7~5.0
下位尺度Ⅴ【学生間交流】	3.8	1.0~3.3	3.4~4.9	5.0
下位尺度Ⅵ【学生・演習への態度・対応】	4.0	1.0~3.4	3.5~4.8	4.9~5.0

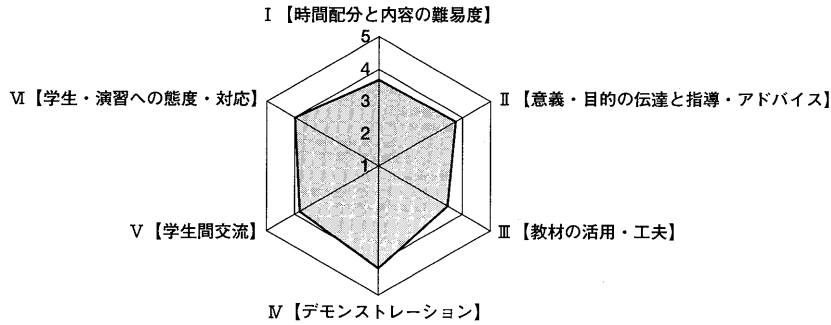


図1 演習の得点状況

表4 授業過程評価：下位尺度39項目の平均値と標準偏差

下位尺度項目	平均値と標準偏差
I 時間配分と内容の難易度	3.7±1.1
1. 学生全員が実際に練習することができた	4.3±1.0
2. 演習の内容に対して授業時間は適当であった	3.7±1.0
3. 説明時間と練習時間のバランスはよかった	3.4±1.0
4. じっくりと落ち着いて練習できた	3.6±1.1
5. 演習の進み方は、速すぎることも遅すぎることもなかった	3.6±1.0
6. ノートをとるための時間はちょうどよかった	3.0±1.1
7. 演習の時間がむやみに延長したり短縮されることはなかった	3.9±1.1
8. 学生の疲労度、集中力に応じ、適宜休憩時間があった	3.6±1.1
9. 演習は、複雑すぎず、わかりやすい展開であった	3.6±1.0
10. 演習は、現実の看護場面をイメージできる展開であった	3.5±0.9
11. 演習の流れは、順序よく整理されていた	4.0±0.9
12. 演習はこれまで学んだ知識との関連がわかる展開であった	3.9±1.0
13. 演習は難しすぎることもしずすぎることもない展開であった	3.5±0.9
II 意義・目的の伝達と指導・アドバイス	3.8±1.0
14. 演習の目的がわかりやすい展開であった	4.0±0.9
15. 演習の要点がよくわかる展開であった	3.9±0.9
16. 実際にやってみる意義がよく伝わる展開であった	4.0±0.9
17. 教員の説明の速さは、速すぎることも遅すぎることもなかった	3.6±1.1
18. 指導・アドバイスのタイミングはちょうどよかった	3.8±1.1
19. 教員は、学生が行っている方法の修正の必要性や方向性があるように指導や説明をしていた	3.9±1.1
20. 教員の指導は丁寧であった	3.8±1.0
III 教材の活用・工夫	3.5±1.0
21. プリント・ビデオなど、内容理解を助けるための教材を適度に使用していた	3.5±1.0
22. プリント・ビデオなど、教材をわかりやすく工夫して用いていた	3.5±1.0
IV デモンストレーション	4.2±0.9
23. 良いタイミングでデモンストレーションがあった	4.0±0.9
24. デモンストレーションの速さはちょうどよかった	3.9±0.8
25. デモンストレーションの時間は、長すぎることも短すぎることもなかった	4.0±0.9
26. 教員は手際よくデモンストレーションを行っていた	4.5±0.7
27. 教員はデモンストレーションをよく見えるように行っていた	4.3±0.8
28. デモンストレーションの時、教員の声はよく聞こえた	4.4±0.8
V 学生間交流	3.8±1.0
29. 学生間で十分話し合いながら進められた	3.6±1.0
30. 学生間で協力しながら進められた	4.0±1.0
VI 学生・演習への態度・対応	4.0±1.0
31. 教員は、学生の主体性を尊重していた	3.8±0.9
32. 教員は、学生が自分で考えながら行動できるように関わっていた	3.8±1.0
33. 指導・アドバイスの時間が長すぎることはなかった	4.2±0.9
34. 必要なときはいつでも教員に質問することができるようになっていた	3.6±1.0
35. 教員は学生の質問に対してきちんと答えていた	4.0±1.0
36. 教員から学生への質問のタイミングや方法は適切であった	4.0±0.9
37. 患者役の学生のプライバシーが保護されるようなことはなかった	4.2±0.9
38. 教員は学生を一人の人間として尊重していた	3.9±1.1
39. 教員の真剣さが伝わる演習であった	4.5±0.8

下位尺度Ⅰ：3.「説明時間と練習時間のバランスはよかった」
 6.「ノートをとるための時間はちょうどよかった」
 10.「演習は、現実の看護場面をイ

メージできる展開であった」

13.「演習は難しすぎることもやさしすぎることもない展開であった」

下位尺度Ⅱ：17.「教員の説明の速さは、速すぎることも遅すぎることもなかった」

下位尺度Ⅲ：21.「プリント・ビデオなど、内容理解を助けるための教材を適度に使用していた」

22.「プリント・ビデオなど、教材をわかりやすく工夫して用いていた」

下位尺度Ⅴ：29.「学生間で十分話し合いながら進められた」

下位尺度Ⅵ：34.「必要なときはいつでも教員に質問することができるようになっていた」

平均得点が高めであるのは、以下の通りであった。

下位尺度Ⅰ：1.「学生全員が実際に練習することができた」

11.「演習の流れは、順序よく整理されていた」

下位尺度Ⅱ：16.「実際にやってみる意義がよく伝わる展開であった」

下位尺度Ⅳ：26.「教員は手際よくデモンストレーションを行っていた」

27. 「教員はデモンストレーションをよく見えるように行っていた」
- 下位尺度V：30. 「学生間で協力しながら進められた」
- 下位尺度VI：33. 「指導・アドバイスの時間が長すぎることはなかった」
35. 「教員は学生の質問に対してきちんと答えていた」
36. 「教員から学生への質問のタイミングや方法は適切であった」
37. 「患者役の学生のプライバシーが侵害されるようなことはなかった」
39. 「教員の真剣さが伝わる演習であった」

2. 演習体制評価・事前学習自己評価（表-5）

1) 演習の実施時期

表5 演習体制評価・事前学習自己評価の結果

	良い（役に立った）	どちらとも言えない	悪い（役に立たなかった）
演習の実施時期	43.3 %	47.2 %	9.5 %
演習の人数	100.0 %	0 %	0 %
演習時間	71.6 %	25.6 %	1.4 %
事前課題・振り返り用紙の活用	89.0 %	11.0 %	0 %
事前学習への取り組み	24.3 %	58.1 %	17.6 %

3) 演習時間

135分を演習時間とし、その間に10分間の休憩をとった。71.6%の学生が「良い」と答えており、「濃い内容の演習ができた」「十分に練習できた」「集中できた」「内容により時間が分けられており切り替えて学習できた」と述べていた。「どちらとも言えない」とした学生は25.6%であり、「もう少し時間がほしい」と述べている学生が多かった。

4) 事前課題・技術演習振り返り用紙

事前課題・技術演習振り返り用紙が「役に立った」と答えた学生は89.0%であり、「事前に疑問点を把握できた」「演習が理解しやすかった」「復習できた」と述べていた。「どちらとも言えない」と答えた学生は11.0%であり、「よくまとめることができなかった」「時間内に書ききれないところがあり、不足してしまう」と述べていた。

5) 事前学習自己評価

事前学習を「十分行った」とした学生は24.3%であり、友人や先輩からの指導も受けながら学習

基礎看護学実習Ⅱと続いて実施していることに関して、時期的に「良い」とした学生が43.3%、「悪い」とした学生が9.5%であり、残りの学生は「どちらとも言えない」と答えていた。「良い」とした学生は「練習を行う時間が十分にとれる」との感想を述べている者が多く、「悪い」とした学生はスケジュールが過密になることを理由に述べた者が多かった。「どちらとも言えない」とした学生の中には「オリエンテーション後期間が開いてしまう」などの意見はあったが、多くは「時期的には良い」と答えていた。

2) 演習の人数

1グループ20人前後であることは、「デモンストレーションが見やすい」「質問がしやすい」「自分の技術をよく見てもらえる」「練習がスムーズにできる」等の理由で、全員が「良い」と答えていた。

した学生が数名いた。58.1%の学生は「どちらとも言えない」と答えており、「十分に学習したつもりが、演習を行うことで不足であったことに気がついた」と述べた学生が多かった。

事前学習の自己評価が、演習評価に関連するかをt検定で比較してみたが、総合得点、尺度ごとの平均得点共に差は見られなかった。

V. 考察

1. 授業過程評価

総得点・各下位尺度得点ともに中得点領域にあり、授業過程評価スケールの解釈に従うと、「平均的な演習」であったと考える。しかし、その中でも低めの得点項目に関する教授活動を見直すことによって、演習過程の質を高め、学生の学習活動を向上させることが期待できる。

1) 下位尺度I：「時間配分と内容の難易度」

「説明時間と練習時間のバランス」「ノートをとるための時間」「看護場面をイメージできる展

開「難しすぎることもやさすぎることもない展開」は、他項目に比較すると平均得点がやや低めであった。「説明時間と練習時間のバランス」「ノートをとるための時間」は、一つの演習が終わった際に技術や学習内容を振り返り、考える時間を設定していなかったことが、原因として考えられる。一度で行う演習の種類が少なくないことから、振り返る時間の確保は演習の内容理解・自己の振り返りには欠かせないものとする。またこのことが「難しすぎることもやさすぎることもない展開」が低めであったことにも関連するものと思われる。「看護場面をイメージできる展開」については演習場面の設定が適切か否かの検討が必要と考える。

「学生全員が実際に練習することができた」「演習の流れは、順序よく整理されていた」はやや高めであった。演習過程の準備を整えることができていたと考えられるが「学生全員が練習できた」としながらも、「説明時間とのバランス」に問題が残ることから、学生が考えながら練習する時間の確保を検討する必要がある。

2) 下位尺度Ⅱ：「意義・目的の伝達と指導・アドバイス」

「教員の説明の速さは、速すぎることも遅すぎることもなかった」は、他項目に比較すると平均得点がやや低めであった。学生が具体的にどのように捕らえているか、評価結果からは判断できないため、状況確認と改善策の検討が必要と考える。

「実際にやってみる意義がよく伝わる展開であった」はやや高めであった。技術の目的や裏付けが、事前学習や講義を通して理解されていたためではないかと考える。

3) 下位尺度Ⅲ：「教材の活用・工夫」

「プリント・ビデオなど、内容理解を助けるための教材を適度に使用していた」「プリント・ビデオなど、教材をわかりやすく工夫していた」は、平均得点がやや低めであった。事前の講義でビデオ教材、講義でプリントを使用して学習していたが、「理解のしやすさ」から見た教材であったかどうかの確認が必要である。また、教材が演習でうまく活用されていなかった可能性も考えられ、教材の工夫と、学生が活用しやすいように演習との関連づけができる指導の工夫をする必要がある。

4) 下位尺度Ⅳ：「デモンストレーション」

下位尺度Ⅳでは平均得点が低めの項目はなく、「教員は手際よくデモンストレーションを行っていた」「教員はデモンストレーションをよく見えるように行っていた」がやや高めであった。演習に向けた教員側の準備性や、演習をグループ分けし、教員一人あたりの人数を少なくしていることから目が届きやすく、効率的なデモンストレーションが実施できたと考えられる。

5) 下位尺度Ⅴ：「学生間交流」

「学生間で十分話し合いながら進められた」は、平均得点がやや低めであり、「学生間で協力しながら進められた」が高めであった。協力体制には問題はないと思われ、下位尺度Ⅰと同様に時間配分の検討が必要であると考えられる。

6) 下位尺度Ⅵ：「学生・演習への態度・対応」

「必要なときはいつでも教員に質問することができるようになっていた」は、平均得点がやや低めであった。また、「指導・アドバイスの時間が長すぎることはなかった」「教員は学生の質問に対してきちんと答えていた」「教員から学生への質問のタイミングや方法は適切であった」「患者役の学生のプライバシーが侵害されるようなことはなかった」「教員の真剣さが伝わる演習であった」がやや高めであった。このことから、6～7人の小グループに一人ずつ教員が担当しているため、質問できる体制であったと考えられるが、下位尺度Ⅰで考えられたように、時間の確保が必要である可能性が考えられる。

2. 演習体制評価・事前学習自己評価

基礎看護学実習Ⅱと続いて実施していることに関して、「良い」とした学生が多く、その理由は「練習を行う時間が十分にとれる」とのことが多かった。「どちらとも言えない」とした学生は「オリエンテーション後期間が開いてしまう」などの意見はあったが、多くは「時期的には良い」と答えており、演習時期は妥当ではないかと考える。

1グループ20人前後であり、さらに小グループが6～7人であることから、デモンストレーションの見やすさや練習のしやすさ、指導の受けやすさがあったようである。演習時間は妥当としながらも、練習や指導を受ける時間、技術を振り返る

時間が少なかった傾向にあり、少人数の構成である分、時間に影響がでる結果となった。十分な理解が得られるためには時間配分の検討が必要である。

事前学習が十分行えた場合とそうではなかった場合、演習の受け止め方に違いがあるのではないかと考え、事前学習自己評価と演習評価を比較してみたが、総合得点、尺度ごとの平均得点共に差は見られなかった。

VI. 結論

現在実施している演習は「平均的な演習」であったと考えられるが、学生が演習をその場で振り返ることができる時間の確保、演習前に学習した教材との関連づけを行うことにより、より効果的な演習の機会を得ることができることが明らかになった。

引用文献

- 1) 舟島なをみ・杉森みどり：看護学教育評価論，文光堂，p 38，2003

参考文献

- ・ 久米美代子・安東良恵・古畑真希子：母性看護学 学内演習効果—教授 Flow chart による学習方法とその効果—，ペリネイタルケア，Vol.19 No.4，2000
- ・ 西脇洋子・岡村典子・小林ミチ子：基礎看護技術演習過程の評価—「看護系大学授業評価スケール<看護技術演習用>」を用いて—，新潟県立看護短期大学紀要，7，p 65-75，2001
- ・ 斉藤法彦・佐藤美樹・七戸清恵・佐藤久美子・及川建弘：ICUの臨地実習指導に対する学生評価，第36回日本看護学会論文集—看護教育—，2005
- ・ 富所京美・石井奈穂子：母性看護学における演習内容の検討，神奈川県立平塚看護専門学校紀要，No.9，2002
- ・ 鳥井元純子・大菅茂美・小川洋子・柏戸弘子・坂本睦子・曾我美和子・堤田喜美子・東泉紀美代・三輪田隆子：臨地実習終了時における看護学生の実習過程に対する評価—舟島の授業評価スケールを用いた3年課程・2年課程の学生アンケート調査からの考察—，第35回日本看護学会論文集—看護教育—，2004